

『シュウチヤク』

名暮 ゆう

グレイスレイド家はアレイズ王国の地方貴族である。

彼（か）の領邦は王国内の南方に位置しており、通年温暖な気候であることから、王国内の農産業を担う重要拠点の一つとして目されている。今年も見渡す限りの広大な平野が小麦色に色づいており、従事者らが働き蟻の如く小麦刈りに勤しむ様子は南方の伝統風景として例年多くの見物人がグレイスレイド農場に足を運ぶ。

……見物人と言っても、そのほとんどが王都で暇を持って余した貴族らだが。この時期のグレイスレイド家は実に多忙である。収穫された小麦を倉で保存し、取引先の確保、更には前述した貴族らのご機嫌取りまで強いられるのだから。貴族らはこの見物を「収穫祭の祝着」と声高に評する。しかし、それが建前として形骸化されてしまったことは、往来する貴族を見れば嫌でも理解できてしまう。彼らは王都を離れ、南方という辺境の地で、まさに先日収穫された良質な小麦で作られたパンを片手に、何十年もの先のアレイズ王国について語らうのである。「父上は斯様な俗物の相手もしなければならぬのだから、酷だな」

「……坊っちゃん。争いの火種となる発言はくれぐれも

お控えください」

坊っちゃんと呼ばれた少年は、召使いに背を向けながら飽くまで無回答の様相を保っていた。齡十とは到底思えない焦らし方である。これが貴族の子息としての風格なのか。

シガロン・グレイスレイドは、少年と呼ぶには少し大人びている。勉学に秀でているのはもちろんのこと、周囲との調和に長けており、喧嘩に走ることなく交友関係を構築できる。父親はシガロンの成長を見込み、王宮貴族として仕えるよう英才教育に励んできた。シガロンが王都の貴族学校に通うのも、その一環である。

「……あのような俗物には、なりたくないものだ」

昼間から酒に酔い潰れ、戦争の是非について声高に叫ぶ貴族らを窓越しに、新築の小屋で早々ついた傷に辟易するような視線を送っていた。王都の様子を目の当たりにしてきたシガロンにとって、王宮貴族というものは軽蔑の視線を向けるべき対象であった。

……かつて、シガロン自身も王宮貴族に憧れの目を向け、父親の理念を疑問に思う時期があった。王宮貴族と言えば、国王直属の臣下として政（まつりごと）を補佐し、国王には及ばないものの、絶大な権力を有し国家を牽引する役割を担う。召し抱えられるのは貴族の中でも一握りで、王宮勤めは貴族の誉れである。幼いシガロンもかくありたいと切望していたのだ。

だからこそ、王宮貴族の打診を受けない父上が理解できなかつた。傍から見れば、国王の命令に背くも同義である。王国のために、安寧のために働けるのだから、それを全うするのが道理ではないか。

「何故父上は王宮貴族の打診を受けないのですか」

ある日、シガロンは父親に正々堂々問うた。彼は自分の疑問を払拭することに誠実であつた。

「……私はこの穀物地帯が好きだ。長閑で人気がないように思えて、農村の人々は気力に満ち満ちて和気藹々としている。人々はよく働き、人柄も良い。このような場所を守るために私は存在するのだと、そう確信している」
シガロンは啞然とした。彼にとつてこの場所は刺激が少ない。それでも父親はこの田舎地域に存在意義を求めている。何故なのか。

「……シガロンはどうしたい？」

やがて父親はシガロンに違和感を覚えたのだろう、その意思を問うように言葉を投げた。

「……私は、王宮貴族になりたいです」

「そうか。王宮貴族になりたいか。では、せめてシガロンが類い稀なる王宮貴族として大成する姿を見てから安らかな眠りにつきたいものだよ」

当時のシガロンは、父上が口にした言葉の真意を理解するまでには至らなかつた。そもそも、シガロンには普遍的な王宮貴族というものがてんで分からなかつたのだ。

だからこそ、王都に進学することが決まつた時は今にも大空を飛ばたいしまえるほどに喜んだ。ようやく自分の居るべき場所に進めるのだと、心の底から信じていた。昨年の冬、彼は王都に向けて馬を出した。多数の召使、農業従事者、そして父上に見送られての旅立ちであつた。

……結論として、王都はシガロンの肌合わなかつた。彼は王都に居場所というものを見いだせなかつたのだ。

例えば、王都に牛を百頭ほど放牧できる区画があるとしよう。その区画内で、五百人を超える人間が列を成して歩いているのだ。啞然としてみると、通行の邪魔だと言われ、露店を眺めていると、買う気がないのなら去れと怒鳴られる。その日生きるための硬貨を稼ぐことだけに頭が支配されるからか、人間特有の温かみが消えてゆくのだ。

そして何より、王宮貴族が酷かつた。酷かつたとは、それ以上に相応しい言葉が見つからなかつたのである。傲慢で色欲に飢え、表では国王に従順ながら、裏では今にもその寝首を掻こうと画策している。なるほど、そう考えると貴族らが収穫時期にわざわざ王都からグレイスレイド領邦にまで足を運ぶ理由も領ける。同時に不本意ながら罪を被せられている父上が不憫で仕方がなかつた。

……そうだ、父上だ。
シガロンは父親に言われた言葉を思い出した。

——類い稀なる王宮貴族として大成する。

王都の喧騒に慣れないシガロンからすれば、それは一つの継るべき至言のようなものであった。離れることで初めて、故郷が居場所であることを確信したのである。同時に父上が王宮貴族の打診を受けない理由も明瞭になった。切望したかつての自分を蹴り殺したいとすら思った。一方で、普遍的な王宮貴族が如何に害悪であるかを早急に知ることができた——これ自体には計り知れない意義があるとシガロンは考えた。

要するに、類い稀なる王宮貴族の真意を理解したのである。

それからのシガロンは心を入れ替え、改めて王宮貴族となることを誓った。勉強はもちろん、貴族としてのマナーや人脈の拡大に勤しんだ。それでも、グレイスレイド領邦から目を逸らすことはなく、毎年収穫の時期に帰省し、唯一の肉親である父親との関係を確固たるものとした。

……だからこそ、もどかしさがあった。シガロンが帰省した翌日も、父上は早朝から収穫の準備を行い、昼間は王宮貴族の世話に徹しており、本腰を入れて言葉を交

わす余裕がなかった。何か手伝えることがあれば良いのだが、子供の出る幕ではないと念を押された手前、大人しく勉強に励むしかなかった。

「坊っちゃん、夕食をお持ちしました」

召使いの声が扉越しに聞こえてくる。シガロンは大人しく扉を開け、夕食を受け取った。連日の収穫で得られた小麦を加工したパンに、野菜や穀物を丹精に煮込んだスープ。どれもグレイスレイド領邦で生産されたものだ。「……いただきます」

孤独を代弁するかのような弱々しい声を壁が遮った。窓の外は対を成すかのような賑わい具合を見せている。

それでもシガロンは耐えなければならなかった。これも王宮貴族となるための試練なのだと言いつつも聞かせた。王宮貴族となれば、周囲から妬まれ、常に地位が脅かされていることを留意しなければならぬ。王宮貴族とはそういうもの——絶世の名誉と引き換えに、無数の責任が課せられるのだ。それと比べれば、たった数日の疎遠など苦でもない。苦でもない、そう感じなければならぬのだ。

——ただ。

それでもささやかな期待を抱くなら。
できることなら、父上と食卓を囲みながら昨今の情勢

について語りたいものだ。夕食を終えたシガロンは腹の内で飛び回る虫を叩き落とすような暖気で蠟燭を消すと、勢いよくベッドに転がり込んだ。

今日はもう、寝てしまおう。

精神をすり減らしたシガロンは、毛布を包めて抱きつくと、頭で羊を数えながらやがて……意識を失った。

——ほのかに鼻孔をつく臭いで目が覚める。

身体を起こし、周囲の状況を確認する。室内のほとんどは暗がりが見著で、夜であることは瞬時に理解できた。

……では、これは何だ。

赤々と波を打つカーテン越しの怪異は。

月明かりにしては眩しすぎる。赤のスタンドグラスのようだ、しかしそのようなものは我が家に存在しない。そこまで思考が回ると、飛び上がったカーテンを開けた。

「……か、火事?!」

倉が、倉が燃えている。奸臣の高笑いを目の当たりにするような——そんな恐怖心を催す火事であった。シガ

ロンの目を奪ったのはそれだけではない。父上だ、水桶を被った父上が倉に駆け込んだのだ。

「ち、父上!!!!!!」

途端に頭が真っ白になる。火中に飛び込むとは何事か。自殺行為ではないか。

床板をドタバタと鳴らし、階段を転げ落ちるように下る。幸い、火の手はこちらにまで伸びていなかった。玄関の扉をこじ開け、冷静さを欠く表情で倉へと駆ける。

「坊っちゃんッ! いけませんッ!」

「父上がッ、父上がッ!」

倉に飛び込もうとしたところ、集まってきた召使いに全身の自由を奪われる。ふざけるな、貴様らなど求めてはいない。私は父上を——父上だけを求めているのだッ!!!

ヒビだ。

それも類い稀なる大きなヒビ。

フォークが突き刺さった拍子にできたようなヒビが、シガロンの心に生じていた。

汗がしたたる。父上は還ってこない。何度も瞬きをする。父上は還ってこない。声を張り上げ名前を呼ぶ。父上は還ってこない。邪魔をする召使いに噛みつく。父上は還ってこない。倉の扉が焼け落ちる。父上は還ってこない。炎の勢いはいっそう強まる。

父上は、還ってこない……。

シガロンはひたすら藻掻いたが、やがて体力がつき、脱力感に襲われつつも地面から剥がされた。

それでも彼は叫び続ける。

「父上ッ！ 父上ええええッ！！！」

全歯を立て、蛇も思わず固まってしまふほどの眼光を周囲に向ける。

彼は何故父親に執着するのか、その場にいる誰もが疑問に思っていた。もっぱら異なるのだ、悲哀のそれとは同情しようにも、できぬ。彼は一体何を考えているのか、召使いらは疑問を超えて恐怖すら覚えていた。

……そのような思案に、今のシガロンが気を回す余地はなかった。唯一の親類である父親が還ってこないのだ。何があったのか。どうしてこうなったのか。それでも彼には分かってしまう。彼の思い出は、居場所は、全て火中の灰へと変貌を遂げてしまったのだ。

……。

……。

……ッ。

父上は焼死、丹精込めて育てた小麦も全焼、多数の貴族が命を失う事態となった。

シガロンにとって、父上の死は信念の喪失を意味していた。自身の心の支えとなり、成長を喜んでいた唯一の父親が何者かによって殺されたのである。

虚無感の後に、沸騰間近の巨釜のような熱が全身を昂らせてゆく。

倉に火を放った者がいる。それは、父上の焼死が確定した直後に聞いたことだ。誰が父上を殺したのか。湧いて出た疑問に答えるように、小鳥が木の上で鳴き声を上げる。それが耳障りに感じられて、シガロンはすぐさま弓を持ち、今にも飛び去りそうな小鳥をいち早く射抜いた。たつた今、シガロンは動物を殺めたのである。

……倉が焼け落ちた日、アレイズ王国にはある民族が侵入していた。

——トカグ族である。

少数民族のトカグ族はことあるごとに迫害されてきた歴史を持つ。彼らは実に賢い。相手に付け入るのが得意で、歴史の裏舞台で暗躍してきたのだ。シガロンはこの日、母なる大地に誓いを立てた。

——生涯かけてトカグ族をこの手で根絶やしにすると。

どれほど月日がかかろうとも、私をこのような境遇に

陥れた犯人を必ず見つけ出し、この手で討ち果たすのだ。それが私の全うするべき使命なのである。グレイスレイドのそれから行えばいい。

誓いを立てた後、彼の行動は顕著であった。それまで一途に歩んでいた王宮貴族の道を諦め、騎士養成学校に転学した。厳格な鍛錬に耐え抜き、やがて強靱な肉体を手に入れた。全てはトカグ族を串刺しにするためだ。基礎身体能力だけではない。戦史をはじめとする座学に熱中し、常に最上位の成績を修めた。より多くのトカグ族を死に追いやるためだ。更に、貴族学校で培ってきた人脈を駆使し、貴族との新たな関係構築にも注力した。全てはトカグ族の滅亡に賛同する同志を集めるためだ。

彼は在学中、誰よりも充実した学校生活を演出してみせた。内に秘めたる信念をひた隠しにして、愛国心に溢れる気さくな少年を演じて見せたのだ。

「トカグ族は根絶やしにしなければならぬ」
たった一つの信念が、彼の体軀を叩くのだ。

……さて、シガロンが騎士養成学校を卒業する直前、アレイズ王国を巻き込む大規模な戦争が勃発した。このうち、トカグ族が敵国の傭兵として雇われていると耳にしたシガロンは、すぐさま最前線への配属を志願した。成績優秀者が自ら前線行きを志願するのだ、養成学校生

は彼とともに前線へ赴くことを一種の祭事として捉え、次々と手を上げたのである。

こうして、シガロンはアレイズ王国の戦史に残るであろう戦いの数々にその身を投じてゆくことになる。矢の嵐に見舞われる平野を勇敢に駆け巡り、挟み撃ちをもの見事に打ち破り、時には騎士団を鼓舞して先陣を切つて見せた。

ああ、これぞ天下のシガロン・グレイスレイド。その活躍ぶりは王都にも轟き、国王自らが最高位勲章をシガロンに授与するほどであった。英雄という言葉は彼のためにあるのだろう、それらは彼を王宮貴族として召し抱えるのに十分すぎるほどの理由となった。一度諦めたはずの王宮貴族に、国王自らがそうなるよう望んでいるのである。これはシガロンにとつて予想だにしない出来事であったが、悲願と言い換えることもできた。

何故なら、父親も同様に王宮貴族となるよう国王に打診されたからであった。最愛の父親と同じく、召し抱えられる形で王宮貴族となるのだ、これ以上の誉れは存在しない。後は、類い稀なる王宮貴族として大成するのみである。国難を救った英雄、まさに息絶える寸前で現れた救世主——シガロンはそれら全てを自身の目的を果たすために利用した。

——類い稀なる王宮貴族として大成すること。

——父上の仇であるトカグ族の滅殺。

彼は本音を誰にも語ろうとはしなかった。話してもどうせ理解できないと——そう思っていたわけではない。自らの境遇を憂う視線が何よりも嫌いであったからというわけでもない。彼はただ、口外によってそれまで体を成していた確固たる信念が内側から溶けていくことを危惧したのだ。

「……私は、本当にこのまま突き進んで良いのだろうか」
野営中、彼がふと口にした言葉こそが本音なのである。実のところ、彼は既に父親の相貌が曖昧となっていたのだ。夢想する父親は微笑んでいるのか怒りを露わにしているのか、それすら判別がつかなかった。シガロンは随分歳を取ったと考え、感傷に浸った。齢三十六である。妻子を持たず、己が信念を果たすために心血を注いできた。それこそが正しい行いであると、彼は信じ切っていた。

「……グレイスレイドが最前線で暴れたいと言うのであれば、余はそれを支持しよう」

シガロンが王宮貴族としての任に就いた日のこと。国王は彼にそう告げた。幸い、国王はトカグ族に敵意を抱いていた。そしてそれは、シガロンへの同情でもあった。南部の小麦地帯を尽く荒らし、有力な地方貴族のグレイスレイド家を没落させた罪は大きかった。

同時にそれは、シガロンが容易に邪念を断ち切れない理由となってしまうた。自分は何か、とんでもない呪いに突き動かされているのではないか、腹中に魔物が潜んでいるのではないか——頭を回す時間があれば、そのようなことを常に考えていた。

やがて、アレイズ王国が優勢を保っていた戦争に劣勢の兆しが見え始める。鉄砲なる殺戮兵器が実戦導入されたのである。

「あれは人を殺すために最適化された武器です」

「誰がそのようなものを作った」

「……トカグ族です」

作戦本部に落雷が落ちた。シガロンの怒号である。

そしてその日、アレイズ王国は歴史的な大敗を喫したのだ。

国王が崩御したとの一報が前線に伝えられたのは、それから数日の後であった。幸い、前国王には世継ぎがいた。しかし、あまりに幼すぎた。後を継がせるのは時期尚早という理由から、当分の間は前国王の弟が宰相として国家を主導することとなった。この弟の台頭こそが、神経をすり減らし続けるシガロンに更なる追い打ちをかける事態となったのだ。

前国王の時代に肯定されていたトカグ族の虐殺が許されざる行為として認定された。それに留まらず、新国王

はそれまでアレイズ王国が採っていた拡大方針を破棄し、周辺諸国との融和を望んだのである。

「戦争とは、人糞を両手でこねくり回し相手に投げつけるのと同じだ。手は汚れるし、生じた遺恨は容易に払拭できぬ。それなら人糞の処理を一緒に考えていく方がよほど健全ではないか」

新国王が多様性と形容したそれは瞬く間に国内外へと浸透した。戦争で疲弊した諸民族は融和を声高に叫び、兵士は武器を捨てて花を編んだ。シガロンは悲鳴によく似た咆哮を上げた。彼が意のままに突き進めたのは、ひとえに前国王との考えが一致していたからである。それがどうだろう、上がすげ替えられた瞬間に全てが砕け散ったのだ。

何故こうなってしまった。前国王の早死が全ての原因だ。いや、それよりも、父上の死を受け入れず復讐劇に突き進んでしまったのが原因ではないか。やめろ、それは何より自身の人生を否定することになる。誓いを立ててから二十六年、彼の狂気が揺らいだことは一度もなかった。しかし、ここに来て彼は自らの存在意義をその手で否定しかけている。

……これはその弊害なのだろうか。

「亡き国王こそ至高であるッ！」

我々は逆賊に鉄槌を下さなければならぬッ！」

シガロンはこの時、全てをひっくり返せるだけの気風

が到来していると確信していた。我こそが国王に即位するに相応しいとすら考えていた。

最前線から王都まで、百里はあるだろうか。これをたった一週間で成し遂げようと言うのだ。無理に決まっている。騎士養成学校時代からシガロンと付き合っている同志も、これは無理だと反対した。

それは同志ではない。シガロンが求めるものは勝利を確信する死兵であった。望み通りとは言わないが、それなりの人数が揃って彼はすぐさま王都への行軍を開始した。シガロンは騎馬で先導し、彼に命を預けた騎士の多くは鎧を脱ぎ捨て、後を追った。

シガロンは振り返ろうとしなかった。どれほどの同志が彼に付き従おうと、彼は常に一人で戦ってきた。今回もそうだ、彼にとつて自分以外のも同然であり、その手で現国王を討ち果たす気概であった。

彼はそうすることで自分の信念は果たされると信じていた。

……それしか、知らなかったのだ。

王都に続く街道にさしかかる。地面に敷き詰められた石レンガがその目印であった。馬は既に乗り潰しており、その両脚で大地を踏みしめながら、彼は目的地を求め続けた。

背後から物音がしなくなった。正確には、自分以外の

「……」

若き何某は沈黙を強いられた。その事件の一端を知っていたからだ。

当時、王国南方で勢力を拡大していたトカグ族が食糧難に陥り、収穫時期を見計らって穀物地帯に侵攻した。結果として、略奪の見込みがあった穀物は全焼し、食糧難を凌ぐことはできず、多数の餓死者を出してしまった。アレイズ王国民にとっても、トカグ族にとっても、決して良い結末が迎えられなかった出来事であった。

その中でも、対峙する騎士は最大の被害者らしかった。最高位勲章が授与され、王宮貴族として成り上がり、王国内外から一目置かれる英雄が、そのような過去を辿っていたとは。何某は一度も考えたことがなかった。

「……それでも、同情はできない」

当然だ、トカグ族は迫害の中で命を繋いできた一族なのだ。たった一度の不幸で虐殺を志されるのは不公平である。一方で、その不公平を一身に受け続けたのもまたトカグ族であり、何某はそれをこの場にいる誰よりも理解できてしまっていた。

シガロンは何某を一瞥すると、乾いた笑いを浮かべながら言葉を続けた。

「同情？ フツ、笑わせるな。貴様らが同情的なのだ。そして、誰も貴様らに同情などしてはくれぬ。貴様らは今も昔も変わらぬ、正真正銘の下等種族なのだ」

「時代は荒波に見舞われている。そこに舟を出してみろ、勢いよく沈んでいくぞ。沈ませぬために頑丈な船を生み出すのだ。過去を顧み、より良い方向へと舵を切ってゆく。これこそ、我々トカグ族が迫害の末に辿り着いた結論である」

迫害に耐え続け、鉄砲という技術革新を起こしたトカグ族が言うのだ、それには説得力があった。

「結論に辿り着くにはまだ早いぞ、若僧」

「ナニ？」

「私が直々に貴様らを滅するからだ」

「抜かせ、覚悟せよッ！」

何某は鉄砲を投げ捨て、剣を握る。シガロンは体力を振り絞り、雄叫びを上げながら斬りかかった。彼には悪魔が取り憑いているのかもしれない、何某は息を呑んだ

「ハハハッ！ 見よ、国王ッ！ これこそが多様性の否定だッ！ 貴様はたった今、私の前で多様性を否定して見せたのだッ！」

咆哮混じりに発せられたそれは、今にも刃を噛み砕いてしまいうさうであった。

やがて、石造りの道が血に染まってゆく。この血は何だ、誰の血なのだ。

貫いた剣に傷口が吸い付いている。熱い、とにかく熱い、シガロンは水を求めた。戦場を縦横無尽に駆け巡っ

ていた、在りし日の騎士時代には感じられなかった熱気が全身に血走っていた。燻っていた信念が内側から流れ出（い）で、終着を求めるように四方八方に広がってゆく。

「私は……今宵、王都に光を……もたらすツ、のだア……王権の神授を、謳う、豊穰をツ、豊穰を成し得る……ツ」

「……現国王は我々少数民族に市民権を与えようとおっしゃっている。これは数千年の間、迫害を精神に刻み込まれてきた我々にとって悲願そのものだ。それを踏み躪る貴様に生きる資格などあるうか」

「ある」

「ドコニ」

「殺生は……多様性の否定に、他ならないツ。そうだ、貴様はたった今、国王の悲願を、真つ向から否定してみせたのだッ！」

「……フフツ」

トカグの何某は強引に剣を抜き取ると、薄気味悪い微笑みを浮かべながらシガロンに再度剣を突き立てた。喉で泡が弾けるような音がする。

「貴様は最初から存在しなかった。何故ならその骸は、やがて我々の糧となるのだから」

吐瀉物と血液が石レンガに染み込んでゆく。せめてこの死者の記憶だけは残そうと、奥へ奥へと染み込んでゆ

く。しかし、無駄だろう。途方もない時を経て、いずれ全てが無に帰すのだから。

シガロン・グレイスレイドはこの日、終着を迎えた――